

学科・専攻名

国文学科

教育課程・学習成果の検証

1. 学科・専攻の「開講科目数（必修・選択必修・その他）」「非常勤講師比率」「学生の入学から卒業までの平均受講科目数」等のデータを参考に、学生の受講科目数に対して開講科目数は適切か、非常勤講師比率は適切か、学生にとって体系的な科目編成となっているか等を検証

【検証結果（全体概要）】

「教育課程編成・実施の方針」に基づき、1 年次の国文学・国語学に関する基礎的知識の獲得から 4 年次における卒業論文作成へと順を追って専門性を高めることができるよう、各科目の連携・関連を図り体系的な教育課程を編成し実施している。具体的には、1 年次には古典文法の学び直しから始まり（入門演習 A）、国文学・国語学に関する基礎知識を身に付け（国文学基礎講座、国語学概説、国語史、国文学史など）、さらにくずし字解読の技能を修得する（入門演習 B）ことによって、2 年次以降に必要な基礎学力を養う。また 1・2 年次を通して発展的授業（各時代及び分野別の講読）を履修することにより知識を深め、研究の方法論を学ぶとともに、2 年次の基礎演習においては調査能力を身に付ける。また、京都の歴史・風土に触れるための実地学習を行い、近隣に史跡や社寺が多い本学の立地を活かした学びを実施している。3 年次には、特殊講義などで専門的知識をさらに深めると同時に、演習科目を国文学の各時代及び国語学・漢文学の分野の中から二つ選択し、主体的調査・批判能力、合理的思考力を養う。4 年次では学びの集大成として卒業論文を作成し、一段と高い専門的知識と技能を身に付け、課題発見・解決能力を養う。その結果として、生涯にわたって学び続ける能力が確立することを目指している。

カリキュラムは、国語史、国文学史、講読、特殊講義等を相互に関連を持たせながら体系的に編成しており、上代国文学から近代国文学、国語学、漢文学まで幅広い分野の講義科目を開講している。さらに、演習科目も入門演習（1 年次）から基礎演習（2 年次）・演習 I（3 年次）・演習 II（4 年次）と、4 年間続けて履修することで、アクティブラーニング・少人数での教育を実施している。

国文学科の専門科目については、学生たちからも比較的高い評価を得ている。2020 年度卒業時アンケート結果では、「身についた能力」の項目で、「専門分野の知識・技術を理解・習得する力」の数値が 49.0 で、大学平均の 43.7 より 5 ポイント以上高い。また「専門的な知識が身につく授業が多い」という回答が 43.0 であり（大学の全体平均は 30.0）、学科別数値においても 4 位である。

また、国文学科では、必修科目・演習科目および教職課程の「教科及び教科の指導法に関する科目」（「教科に関する専門的事項」）の必修科目については、原則として専任教員が担当している。演習科目においては、できる限りきめこまやかに少人数授業を実施できるように、一人の教員が 2 クラス（2 コマ分）担当することもある。また、その他の科目についても、可能な限り専任教員で担当するとともに、各分野で活躍されている非常勤講師を招いて指導を仰ぐことで、学生たちの関心に幅広く応えられるようにしている。このような方針に基づき、毎年度、科目担当者を決定しており、全学的に見ても国文学科の非常勤講師比率は比較的低い数値となっている（2020 年度は、全体平均 35.0%、国文学科 29.6%）。このことから、国文学科においては、専任教員による責任体制が取られており、非常勤比率は適切であるといえる。

【成果および向上施策】

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】

特筆すべき事項なし。

2. 「卒業時アンケート」「PROG（ジェネリックスキルテスト）結果」「学修行動比較調査」「進路・就職状況」「免許・資格取得状況」「休学・退学・留年数」「授業アンケート結果」等のデータを参考に、学科・専攻の教育について、効果が挙げられている点、改善すべき点を検証

【検証結果（全体概要）】

2021 年「卒業時アンケート」の「卒業時の個別評価」において、国文学科卒業生の満足度が全体平均より 5 ポイント以上高い項目として、「歴史や伝統を感じることができる」が挙げられる（48.0、大学の全体平均 35.1、学科別数値において 1 位）。これについては、本シート 1 で記したように、国文学科では本学の立地を活かして、京都の言葉・文学・文化・風土・歴史などに触れて理解を深める機会が多いことが、一定の効果をあげていると想定できる。

また、同アンケートの「身についた能力」において、国文学科卒業生の満足度が全体平均より 10 ポイント以上高い項目として、「物事を論理的に考える力」「物事をさまざまな視点から考える力」「物事に進んで取り組む力」「目的を設定し確実に行動する力」「現状を分析し目的や課題を明らかにする力」「課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力」「自分の意見をわかりやすく伝える力」「相手の意見を丁寧に聴く力」が挙げられる。これについても、本シート 1 で記した 4 年次までの学び及びその集大成である卒業論文作成への取り組みと深く関わると考えられる。

同アンケートの「成長の機会」において、国文学科卒業生の「卒業論文・制作を仕上げたこと」という項目の数値が 2018・2019・2021 年で高いことも、そのことを裏付けよう。自ら課題を発見し、資料を収集検討して、論理的に思考した結果をまとめあげてゆく卒業論文の作成に取り組むことが、国文学科の学生たちにとって、自らを成長させ、「物事を論理的に考える力」を身に付ける重要な機会になっていると考えられる。さらに「成長の機会」の中で 2021 年は「素晴らしい授業に出会えたこと」（32.0%、平均 19.7%）、「尊敬できる授業、先生に出会えたこと」（25.0、平均 19.8）の数値が高く、授業内容および教員の指導・熱意が卒論作成の上でも重要な要素となっていることがうかがえる。これは、「身に付いた能力とその源泉」で、「物事を論理的に考える力」他 15 項目において「ゼミ・実習・研究」を挙げる数値が「身に付いた能力の源泉の中で最も高いスコア」となっていることから裏付けられる。

一方、同アンケートの「卒業時の個別評価」において、国文学科卒業生の満足度が全体平均より 10 ポイント以上低い項目として、「目指す資格が取得できる」「将来の職業に役立つ知識・技術を身につけられる授業が多い」があげられる。また、「身についた能力」の項目において、「専門分野の知識・技術を実際に活かせる力」が 2019 年・2020 年は平均より 10 ポイント以上低かったことも目立った（但し 2021 年は 17.0、平均は 20.9 と差が小さくなった）。これらは、国文学科では、「進路に直結する授業が少ない」ことを示している。確かに一見すると国文学科では「将来に直結する授業が少ない」かもしれないが、在学中に身に付けた「物事を論理的に考える力」や「課題発見・解決能力」は、あらゆる職業で活かされていくものと考えられる。国文学科の学生たちには、国文学科での学びが将来に活かされるということを明示し、モチベーションを高められるよう指導・助言していくことが必要であろう。なお、「ALCS 学修行動比較調査」においても、「成長実感」の項目で「表現すべき内容の文章を書く力」「学術的な文章の読解力」の項目が、他大学の国文学科・日本文学科よりポイントが高く、こうした点は本学国文学科の強みとして表れている。

資格の取得に関するポイントが低い点については、国文学科で取得できる資格は大学案内や HP を通して、入学前に把握している学生が多いはずなので、「目指す資格がない」のではなく「資格取得に関する履修計画をうまく進めることが出来なかった」という学生が多いのではないかとと思われる。とすれば、教員が履修相談に乗ることで、ある程度は改善をはかれる可能性がある。国文学科では、教員免許を取得する学生が一定数存在し、2018～2020 年度の進路就職状況を見ても、就職決定者の約 7～18%が教員として就職していることなども、学科での学びと進路との関連性において評価してよい点である。さらに、2020 年度より日本語教師の資格も取得可能となり、学生の資格取得の機会が広がった。

なお、「ジェネリックスキル測定テスト結果」から判明するのは、国文学科の学生がリテラシー能力（情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、言語処理能力、非言語処理能力）の平均値は高く、例えば 2020 年度の 3 回生の学科別数値では 5.7 で全学科の中で 1 位である。しかしコンピテンシー能力（対人基礎力・対自己基礎力）は平均を下回っている。ディスカッションおよびプレゼンテーション能力などの対他者的能力を向上させていけるような教育内容も必要と考えられる。学生同士による忌憚ない意見交換が可能となるよう、例えば発言の際には相手に対する敬意を持って発言するように指導するなどの、教員側の工夫も必要となる。

【成果および向上施策】

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】

資格の取得に関するポイントが低い点について、本学科では教職課程履修者および教員資格取得者が多いという点を鑑み、教職支援センターとも連携を取り、学科会議で議論して学生宛資料を作成した。大学院進学と教員免許取得（主に専修免許状）について、及び教員採用試験に於いて各自治体が講じている措置について、4月の教職課程履修者面談において資料を配付し、学生に対して説明を行った。これにより、資格取得に関わる知識・意識を啓発し、進路選択の視野を広げさせるような施策を行っている。

また、国文学科における課題として、休学者・退学者が、全学の平均に比して、比較的多いという点が挙げられる（たとえば、2020年度は在学生数526名に対し、休学者が26名[全学科で最多人数]、退学率が1.5%[全学科の平均は0.9%]）。この課題は、国文学科に限定されるものではなく、文学部全体を通じての課題でもある。

休学や退学については学生一人ひとりの事情が異なるため、学生生活センター・学生相談室・健康管理センターなどとも連携して、ある程度時間をかけて慎重に原因を分析し、対策を講じてゆくしかないを考える。近年、休学や退学の理由として見受けられるのは、「体調不良」や「将来について再考」などである。特に「将来について再考」の場合は、休学・退学願を出すまでに、少しでも早めに学生の悩みを把握して、面談などを通して慰留できることが望ましい。国文学科でも、必修科目を中心に、学生の履修状況や学修状況などについて、随時、学科会議で情報共有を行い、指導が必要な学生に対して迅速に対応できるような体制を整えている。今後も、このような体制を維持し、少しでも休学者と退学者を減じられるように努めていく所存である。

3. 学科・専攻として、教育の質向上・改善に向けた組織的な取り組み（FD）をおこなっているか。
おこなっている場合、それはどのような内容か、どのような課題認識に基づくものか。

【検証結果（全体概要）】

教育活動（授業の分かりやすさ、履修指導、学生の意見のフィードバック等）に対する学生の満足度については、「授業評価アンケート」や「学生生活実態調査」を基に、学科内FD活動として学科会議で検証している。1年次対象の「入門演習」、2年次対象の「基礎演習」の授業内容・方法、成績評価の方法について毎年度末、学科会議にて協議している。また、本シート2で記したように、国文学科では、休学者や退学者を少しでも減らすことができるよう、必修科目を中心に、学生の履修状況や学修状況などについて、随時、学科会議で情報共有を行い、指導が必要な学生に対して迅速に対応できるような体制を整えている。

また、初年次の少人数授業を充実させるために、1年次対象の「入門演習」については、国文学科の教員同士で検討を重ね、古典文法のテキスト（「入門演習A」）、古典文法の復習のための教材（「入門演習A」）、くずし字解読の技能習得のための教材（「入門演習B」）を作成し、教材の開発と改訂につとめている。「学科・専攻のFDの取り組み」の経費として大学から配分される予算を利用して、くずし字解読に関する市販のテキストなども複数購入し、教材の開発と改訂の際の参考にしている（「入門演習B」）。2年次の授業では「基礎演習A・B」で実地学習を行っている。実地学習を行うことにより、本学が京都にあるという利を活かしつつ、教員や学生間の交流を持っている。さらに、できる限りカラー図版などを掲載した資料を学生に提供して理解を深めるようにつとめている。

また、毎年、前年度に提出された卒業論文・修士論文の中で優秀論文を選出し、5月に優秀論文発表会を開催している。この催しは、これから卒業論文の作成に取り掛かる4年生のみならず、1～3年生にとっても国文学科の卒業論文の優秀例を見てモチベーションを高め、「卒業論文とはどのようなものか」を具体的に知ることができ、さらに

は卒業論文作成に臨む上での心構えやアドバイスを卒業生・修了生から受けられる場となっている。2020 年度は新型コロナウイルス感染のため開催できなかったが、2021 年度はオンラインで開催した。

さらに、大学教育の方法論や課題に関する書籍を購入し、教員間で参考図書として活用することにより、大学教育に取り組む上での広い視野や見識を培うよう努めている。

より充実した教育を行うための教員の研究活動については、教員業績データベースを用いて、大学のホームページで公開している。また、研究の活性化を図るべく、京都女子大学国文学会の機関誌『女子大國文』を年 2 回刊行しており、所属教員に投稿を呼びかけている。投稿論文については、所属教員から選ばれた委員による編集委員会にて厳正に審査し、審査結果を編集会議にて協議し、採否を決定している。2016 年度からは「京都女子大学教員業績評価に関する規程」に基づき、前年度業績の評価を行い、学部長・学長による評価を受けて改善活動等に取り組んでいる。

【成果および向上施策】

2020 年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、前期はすべてオンライン授業で実施され、後期および 2021 年度前期は、対面授業とオンライン授業を併用することになった。そこでオンライン環境でも学生たちが学習に取り組みやすいような対策を、学科で話し合って講じてきた。オンライン授業では、教員からのフィードバックに学生からの不満が集まりやすいが、2020 年度前期および後期授業アンケートを見ると、「課題に対するフィードバックは適切に行われていた」の項目で、学科平均は前期が 3.9（大学平均 3.8）、後期が 4.1（大学平均 3.9）と、いずれも大学平均を上回っていること、また「この授業は（オンラインではなく）対面での授業の方が適している」が前期 3.5（大学平均 3.5）、後期 3.6（大学平均 3.7）とオンライン授業でもよいと答えるポイントが上回っていることから、学科教員がオンライン授業にも充分対応できていたと判断される。

【課題および改善施策】

まず、学外からの調査学習が可能となるよう、図書館 HP の「電子の蔵」を学生が活用しやすいように、学外からの接続方法の詳細な案内をはじめ、各種データベースの利用案内などを作成・配信した。上記案内は昨年度初頭に早急に準備して、京女ポータル LMS で配信するなど対応したが、その後も改訂を加え、今年度は、各授業での配信に加えて、ポータルに新たに設けた国文学科全体の Community においても配信した。上記 Community（国文学科全体用と各学年別）の設置に当たっては、情報システムセンターとも連携の上、学科の教員が主導して、学科から学生への伝達が円滑に行えるよう、学生の履修環境の整備に努めた。上記の案内の掲示のほか、教職課程履修者面談で配付した資料をいつでも見られるように掲示する、学科で行っている行事の案内を掲示するなど、学修・資格取得等に関わる情報を学生に速やかに伝達できるよう工夫している。さらに国文学科全体の Community を通じて、2021 年度始めに学科独自のアンケートを採取し、本学科への志望動機やカリキュラムや授業内容に関する学生の意見を徴集し、今後の授業やカリキュラムに関する課題発見・解決の糸口とすべく資料を作成した。

今後、新型コロナウイルス感染対策の動向と合わせて臨機応変に対応してゆく必要がある。

4. 教員組織の編成（採用・昇任等）にあたって、職位構成および年齢構成のバランスに配慮した編成をおこなっているか。また、カリキュラムに基づく教員組織となっているか。

【検証結果（全体概要）】

国文学科の 2021 年度における教員数は 13 名、年齢構成は、60 代 4 名、50 代 3 名、40 代 3 名、30 代 3 名で、男女比は男性 7 / 女性 6、教授 8 名、准教授 2 名、講師 3 名という構成である。外国人教員は所属していない。

学科としてのカリキュラム・ポリシーを踏まえ、国文学領域、国語学領域、漢文学領域で構成される教育課程・開講科目に対し、上代文学 1 名、中古文学 2 名、中世文学 2 名、近世文学 2 名、近代文学 2 名、漢文学 1 名、国語学 2

名、仏教学 1 名というように幅広い分野・時代に亘る教員を配置しており、担当科目と各研究分野が整合するものとなっている。教員組織とそれぞれの研究分野については、「大学案内」や大学ホームページに公表されている。

2020 年度における専任教員の平均年齢は 51.85 歳であり、大学全体から見るとやや平均より若い（2021 年度から 30 代教員が 1 名加わり、平均年齢はさらに下がっている）。これは職階が教授・准教授、年齢層が 40 代以上に偏在しがちな本学教員の中では、若手を多く配置しているためである。全体的に、年齢構成・性別・職階のバランスが取れている。但し、現状では国文学の全分野を覆うに過不足無いとはいえ、人数の面でも分野の面でも、これ以上の減員は不足が生じる。

【成果および向上施策】

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】

60 代の教員がやや多いことに鑑み、今後の人事においては職位や年齢のバランスを考えて検討を行う必要がある。

2 にも記載したとおり、本学科では教員免許取得者の割合が高く、教員採用試験の合格者も少なくない。このような現状を考慮すると、国語教育を専門とする専任教員の配置も検討したい。ただし、次の退職者の後任は計画的な学長裁量枠として供出済みのため、国文学を専門とする教員は一名減員となる。大学全体の方針とは言え、これまで同様、或いはより質の高い専門教育を行ってゆくためには、減員は厳しいものがあり、そうした中、教職課程まで人的資源を割り振ることは非常に困難となることが予想される。教職課程の充実を今後の学生募集の一つの柱とするならば、供出した一枠を、国語教育を専門とする教員の採用に充てる、などの施策が望まれる。国語教育は、国文学・国語学とは似て非なる専門性を必要とするものである。